

ころ、血中 CEA 値を 2 以上と未満の群に分けると、CEA 値 2 以上の群 12 例は全例原発性肺癌であった。 ^{67}Ga 陽性で血中 CEA 値 2.0 以上を肺癌と規定するなら false positive 例 0, false negative 例 5 例、全体としての efficiency percent 75%となる。同様にしてツ反、CRP、赤沈を検討したが efficiency percent が低く有用ではなかった。 ^{67}Ga シンチ単独の場合の efficiency percent は 78%と最も高率であったが、false positive 18 例を認め、false positive 例の除去には血中 CEA 値を参考にした方が望ましいと思われる。なお症例を増やし検討を加えるつもりである。

22. び慢性間質性肺疾患の ^{67}Ga シンチの意義

藤本 繁夫 寺川 和彦
太田 勝康 市原 秀俊
小川 和紀 遠山 忠秀
栗原 直嗣 塩田 憲三
(大阪市大・1 内)
井上 佑一 越智 宏暢
玉木 正男

(同・放)

後藤 武 浜田 朝夫
(市立桃山市民病院)

〔目的〕 び慢性間質性肺病変を有する症例に肺肝 ^{67}Ga -scan を行い、臨床的意義を検討した。

〔方法〕 2 mCi の ^{67}Ga -citrate を静注し、72 時間後に標準型 crystal recti-linear scanner にて肺および肝を含めて scan を行った。判定は正常肺の 0 度から肝臓部以上のとり込みを認める 3 度まで 4 段階に分ける方法によった。対象 44 症例に延べ 56 回の ^{67}Ga scan を施行し、うち 25 例には主として経気管支肺生検を施行し、その病理組織像と ^{67}Ga scan の成績の対比を行った。

〔成績〕 原因不明の間質性肺炎 13 例中 scan 成績 2 度のもの 3 例、1 度 6 例、4 例は 0 度であった。過敏性肺炎 4 例、肺サルコイドーシス 4 例、粟粒結核 2 例、好酸球性肉芽腫症 1 例等の肉芽腫

形成疾患および癌性リンパ管炎 4 例、肺胞上皮癌の 1 例は全例 Ga 集積を認めた。病理組織との対比では、大小円形細胞浸潤の強いもの、肉芽腫形成および悪性細胞浸潤を認めるものに Ga 集積を認める傾向があった。一方間質の線維増生の強いものは円形細胞浸潤があっても Ga 集積が認められなかった。

各疾患の治療に伴う ^{67}Ga scan 像の変化は、レ線所見、肺機能成績などと共に経過の判定上有用であった。

〔結論〕 以上よりび慢性間質性肺疾患の ^{67}Ga scan は、各病変の活動性を反映しており、その程度、範囲を知ると共にステロイドなどの治療判定にも有用であると考えられる。

23. 悪性リンパ腫における ^{67}Ga -腫瘍シンチグラフィの臨床的検討

熊野 町子 檜林 和之
(兵庫県立病院がんセンター・放)

病理診断の確定した悪性リンパ腫 140 例（細網肉腫 71 例、リンパ肉腫 29 例、ホジキン病 41 例、その他 26 例）に ^{67}Ga -シンチグラフィを施行し、その像の意義について検討した。原発巣を確認し得た症例は 66%であるが、なんらかの治療を行った後では原発巣の発見率は 10%と低下した。69%の症例に病巣が多発性とし描出された。140 例のうち頭頸部原発のものは 78 例であったが、このうち原発巣が描出されたものは 40%と低率であった。しかし、この場合、原発巣の描出されなかった症例はすべて治療中か治療後のものであった。頭頸部原発で転移巣が描出されたものは 65%であったが、そのうち胸腹部に集積がみられたものは 59%であった。さらに、頭頸部悪性リンパ腫のうち 76%のものに唾液腺が描出されたが、これは放射線治療を受けた症例であった。したがって唾液腺の描出は放射線治療による唾液腺組織の反応性変化及びそれに続発する唾液腺分泌障害によるものと考えられた。